

いつかはこの地域に 恩返しがしたかった

一町工場のIT化をサポートする企業家ネットワーク—



奥山健さん(手前はチタン製のアクセサリー類)

今日は女性企業家と、彼女が参加する異業種交流グループメンバーが共同出資で立ち上げた会社のお話。主に地元の中小製造業をサポートし、地縁ネットワークを大切にしたビジネスを追及するマインドをご紹介します。

中小企業の異業種交流。一九八〇年代からその活動は各地で盛んになり、今日では把握できている交流グループだけでも三〇〇〇グループ以上が存在する(一九九〇年現在)。

千葉商科大学の中山教授によれば、経営活動を直接の目的とした異業種交流グループには開発型・交流型の大きく二つ

のタイプがあるという。目的意識が不明確なままで自然消滅するグループも少なくないが、他方では、産学交流などにより活動に機運あるところもある。

奥山健さん(手前はチタン製のアクセサリー類)

美大卒業後に、グラフィックデザイナーとして活躍していた奥山健さん。バブル景気絶頂期には、日夜激務に追われていたが、ある日、突然性聴覚まで思つてダウン。病床での「いつまで兵隊をやつしているんだ!」—そんな父の言葉に後押しされ、「働く」というのは、雇用されるだけではないのだ」と気づいて、一九九〇年に独立を決意。有限会社オフィス・ウイルを最初は新宿で創業した。

結婚を機に一年後には東京都大田区に拠点を移し、職住近接の生活が始まつてから今年で一四年目を迎えている。事業内容は書籍編集、webサイト構築、ビデオ製作など、健康、福祉、女性問題やインターネットに特化したノウハウを持つ中小企業だ。九七年には女性経営者を中心の異業種交流グループTES(テス)を発足。ちなみに、TESとはTokyo(東京)、Executive(エグゼクティブ)、Society(ソサエティー)の三つの言葉の頭文字を並べたネーミング。奥山さんは当初は広報を担当し、一九九九年から会長に就任した。

現在、TESの会員企業は一七社。男性メンバーも含まれている。活動内容は、創業希望者向けの「女性起業家実践講座」や相談施設への訪問、

東京大田区は、金型や精密機器など、高度な独自技術を持つ町工場の集積でよく知られたわが国が誇る中小企業の町。マスコミでも、技術力の高い区内の中小企業が頻繁にクローズアップされる。けれどもその一方で、中国をはじめ東南アジア諸国との競争が激化し、対応に悩む中

(有) オフィス・ウイル
(有) e-Tes(イーテス)

本社：東京都大田区

オフィス・ウイル
<http://www.officewill.co.jp>

テス
<http://www.ota-tes.cup.com/ow-index.html>



大田ビジネス創造協議会が開発を進める小型水上飛行機の模型

小企業も少なくないのが現実だ。

確かに、高度な職人技は他を追跡させない強みがある。しかし、登録を待つだけでなく、これからはもっと自ら情報発信する手段が必要ではないか? TESの交流会でのそんな発案をきっかけに設立に至った。

TESは、地元の機械部品メーカーのIT化や区内の商店街のホームページ作成などで徐々に実績を上げ、〇一年で約一五〇〇万円、〇二年は三〇〇〇万円と、年間売上は順調な増加を成し遂げた。また、出張型、IT講習では、IT化に遅れた中小企業や商店に直接出向いてホームページの作成、伝票や帳簿作成、チラシの作成などをインストラクターが想切丁寧に指導する。人手不足で、教室に足を運ぶ時間も惜しい中小企業経営者にとっては好評だ。

TESの登録インストラクターは二六名になり、実務経験を持ちながら出産や育児などの理由で家庭にいた三〇~四〇歳代の女性が中心だ。在宅でSOHOビジネスを営む事業者も多く含まれる。奥山氏らが、同じ地域にいながらも接点のなかつた町工場と女性企業家との懇親会役になつたともいえるだろう。

TESの新しい取り組みはまだまだ続く。立ち上げてすぐ見学に訪れる思いで、急場をしのぐ資金調達

された大田区の工場アパート「テクノWING大田」。ここには区内の中小製造業四七社が入居しているが、この岩瀬社長が取り組む消費財の新製品開発の後方支援をしている。

興味深いのは、金属加工の製造業者との連携で生まれたチタンを素材にしたアクセサリーや、世界に一つしかないアート感覚あふれる雑貨たち。これまで廃材となっていた素材に息を吹き込んだのは、奥山氏・岩瀬氏、ともに美大出身のデザインセンスあってこそのことだろう。

また、産学連携組織であるNPO「大田ビジネス創造協議会」にも参画。同協議会では水上飛行機の開発にも乗り出した。こうした活動で、大田区ブランドをもつと世界に発信していきたいと意欲的だ。

そんな奥山さんと、駆け出しから今まで、常に順風満帆な経営だったわけではない。九二年ごろから景気の雲行きがあやしくなり、とりわけ広告業界はその影響を最初に受けた。奥山さんの経営するオフィス・ウイルの取引は半減し、資金繩よりもおほかかない日々が創業後わずか二年後にやつてきた。ワラにもすがる思いで、急場をしのぐ資金調達

ができないものかと役所を訪ねたこともあった。

そんな時、

銀行に突き返され続けた決算書を丁寧にチニックしてくれて、「会社を続けていいですよ」—そう言葉をかけてくれた区役所の融資担当窓口の職員の一言が今でも忘れられないという。融資先を紹介してもらい、会社の一大危機を乗り越えられたからこそ、今日の自分がいる。

「だから私は、この地域に恩返しをしたかったんです」。それが彼女の今の活動の原点でもあったのだった。ちなみに、この三月に奥山さんは、区政発展に寄与してきたことが評価され「特別功労者」として区長表彰を受けた。

地理的空間を超えたインターネットでのビジネスと同時に、リアルな「地図」ネットワークにこだわる奥山さんとTESの活動。

世界を相手にビジネスに挑む東京大田区でも、異業種連携に必要不可欠なのは、昔も今も、顔の見えるコミュニケーションと「地域愛」、そして、それらに支えられた明確な目的があることだった。



SOHOアウトソーシングセミナー